



「音のない世界で80年」

う め の ふ よ こ
梅野芙蓉子

1931年(昭和6年)
熊本県阿蘇市生まれ、
平井在住



聞こえないことが普通だから

2歳の時、中耳炎の高熱で耳が聞こえなくなると母に言われました。母は普通の人と結婚させたいと思っていたようですが、主人のお兄さんにお見合い写真だけで是非是非と言われました。何度も断っていたのですが、母も28歳だから仕方がないと、4回目のプロポーズで結婚を許してくれました。主人も、ろう者(耳に障がいのある人)でした。一度も会わずに、昭和33年11月に熊本市内で結婚式を挙げました。

私は昭和6年3月、熊本県阿蘇の母の実家で生まれました。父、母、1歳上の兄と4人家族でした。家は熊本市内でした。父は列車の郵便物を仕分けする公務員で2、3日に一度しか帰ってきませんでした。

耳が聞こえなくても、子どものころから差別されているとは感じず、近所や兄の友だちと木登りやままごとをして遊んでいました。

大病院の先生に、なるべく早く発語(口から声として言葉を出す)の訓練を始めた方がいいと言われ、昭和11年5歳の時、熊本県立盲啞学校幼稚部に入り、2年間発語の訓練をしました。私が子どもの頃は学校でろう者の手話は禁じられていました。ろう者は耳から音が入ってこないで、声を出すことはとても大変なことで、学校で声を出す方法を習いました。上級生の手話を見て使おうと、母から叱られました。母は「教育ママ」で、発語にはきびしく、家でも練習をさせられ、それがとても嫌でした。母は学校の送り迎えをしてくれましたが、学校の友だちと遊びたくても遊ばせてくれませんでした。でもそのおかげで声を出してしゃべるようになりました。

幼稚部2年の時、ヘレンケラーさんが学校に来ました。私は洋服のことに一番関心があり、ピンクのドレスを着て小さな花のいっぱい付いた帽子をかぶり、背の高いきれいな人でした。耳が聞こえない、目が見えないということでしたが、とてもきれいな青い目をしていて信じられませんでした。係の人がヘレンケラーさんの手を触って、自分の指を動かしていました。後でそれが触手話だということを知りました。子どもだったので「障がい」ということは考えませんでした。今でも私は、聞こえないことが普通だ

から不便じゃないと思っています。

戦争が激しくなって昭和19年、阿蘇に疎開して母と畑をしりました。戦後、熊本に戻り学校に通いました。18歳で学校をやめて洋裁学校に通ったり、編物、お花など花嫁修業をしました。

主人との生活

主人は暮れて仕事が忙しく結婚式にも出席できませんでした。主人の母は、ろう者の息子に嫁がきてくれるとすごく喜んでくれました。父と主人の母と仲人さん、私の4人で26時間かけて東京に着いた時は、汽車のスズで顔はまっ黒でした。写真の印象は良かったのですが、本人に会ってとても優しくそうなので安心しました。

文京区の根津で新しい生活を始めました。ガスを使うのが初めてで怖かったです。使い方は主人の母に教えてもらいました。主人は上野松坂屋の洋服を作る仕事を家でした。私もポケットやボタンホールなどを手伝いましたが、へただと「やるな」と言われました。仕事に厳しい人で、モーニングやタキシードなど高級なものが多く、腕の良い職人で賃金もよかったです。

その後、主人は松坂屋から青山にある洋服屋さんに移りました。昭和63年に、青山のお店が閉店したのを機会に洋服の仕事を辞めました。それからウイスキーの会社で早朝の掃除の仕事をし、65歳で辞めた後は、市ヶ谷にあった会社へ2人で早朝パートに通いました。

外国旅行には、平成2年に娘がハワイで結婚式を挙げたばかりに6回くらい行きました。53歳でダイビングもしました。カヌーにも2人で乗りました。初詣にも2人で明治神宮に行きました。今は1人なので近くの神社に行っています。主人は、孫の顔も見て、平成8年に70歳で亡くなりました。

娘の居なくなった部屋

昭和34年に出産のため熊本の実家に帰りました。12月に娘の貴美子が生れました。泣いている顔を見て「あつ、私はお母さんになれたんだ。私の赤ん坊だ」と、

